

誰ひとり取り残さない多様な学びの場をめざして ～公設民営「フリースペースえん」の取り組み～

認定NPO法人フリースペースたまりば理事長
川崎市子ども夢パーク所長・フリースペースえん代表
元文部科学省「フリースクール等検討会議」委員
神奈川大学非常勤講師

西野博之 ¹

34年前に、不登校児童・生徒との出会い
がきっかけ



「フリースペースたまりば」の開設へ

1991年（29年前）から川崎市内で不登校児童
生徒やひきこもり傾向にある若者たち、さまざまな
障がいのある人たちと共に地域で育ちあう場づくり
を始める

98年から「川崎市子どもに関する条例」の策定に関わる
（調査研究委員会世話人）

「川崎市子ども権利に関する条例」の制定(2000.12)

その具現化をめざして「川崎市子ども夢パーク」

(青少年教育施設) を開設 (2003.7.23オープン)

同じ敷地内に

・冒険遊び場(プレーパーク)

と

・不登校児童・生徒の居場所
フリースペースえん



がある

子ども夢パーク外観



プレイパーク（遊び場）エリア



全天候型スポーツ広場

学習交流スペース「ごろり」



音楽スタジオ



乳幼児親子の部屋

学校教育は
「やりたい」ことより
「やらねばならない」ことが
優先されている

周りからの評価が気になって
自分がしたいことがわからない子が多い

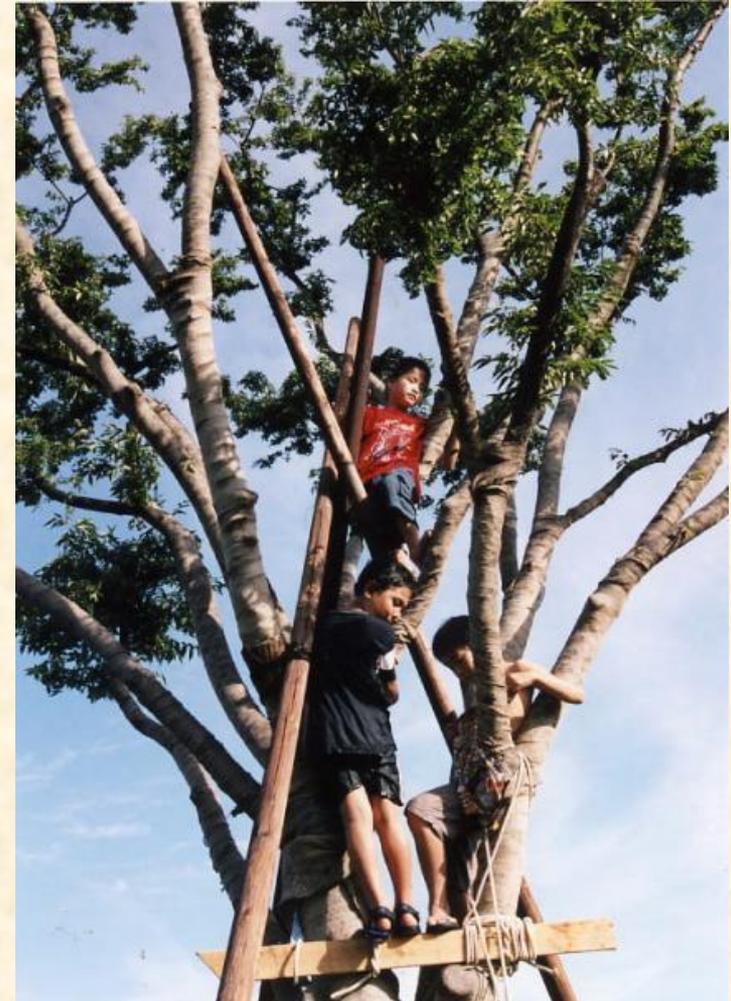
上から与えられることをこなすのではなく
「問い」をたてて、自分なりの答えを見つける
ことを、大切にしている

「やってみたい」
ことに挑戦できる
環境づくり

(原則として「禁止」の看板をもたない)

火・水・土・工具が使える

「ケガと弁当、自分もち」
～自分の責任で自由に遊ぶ～



安心して失敗できる環境づくり

「ケガ」や「失敗」を恐れるのではなく、遊びを通して「失敗」を重ねながら、それを乗り越える力を育む

「できないこと」を受け入れる力も大事

「0・100」タイプの人の生きづらさ



5感を使って、群れて遊ぶ。

～快・不快を手に入れる～



「遊び」が育む力

「非認知能力」を高める



数値化されない力

～人間として生きていく力を育む～

- 目標に向かってがんばる力
- 人とうまく関わる力
- 感情のコントロールができる力

フリースペースえん (子ども夢パーク内)

様々な背景を持つ不登校児童生徒やひきこもりの若者の権利保障を目指してつくられた公設民営のフリースペース。



発達・知的・精神・身体などさまざまな障害や非行などの背景を持つ子ども・若者たちも受け入れている

- ・会費 **無料** ・会員登録制
- ・義務教育年齢にとらわれず、**高校進学後も利用できる**

フリースペースえん会員 年齢別内訳

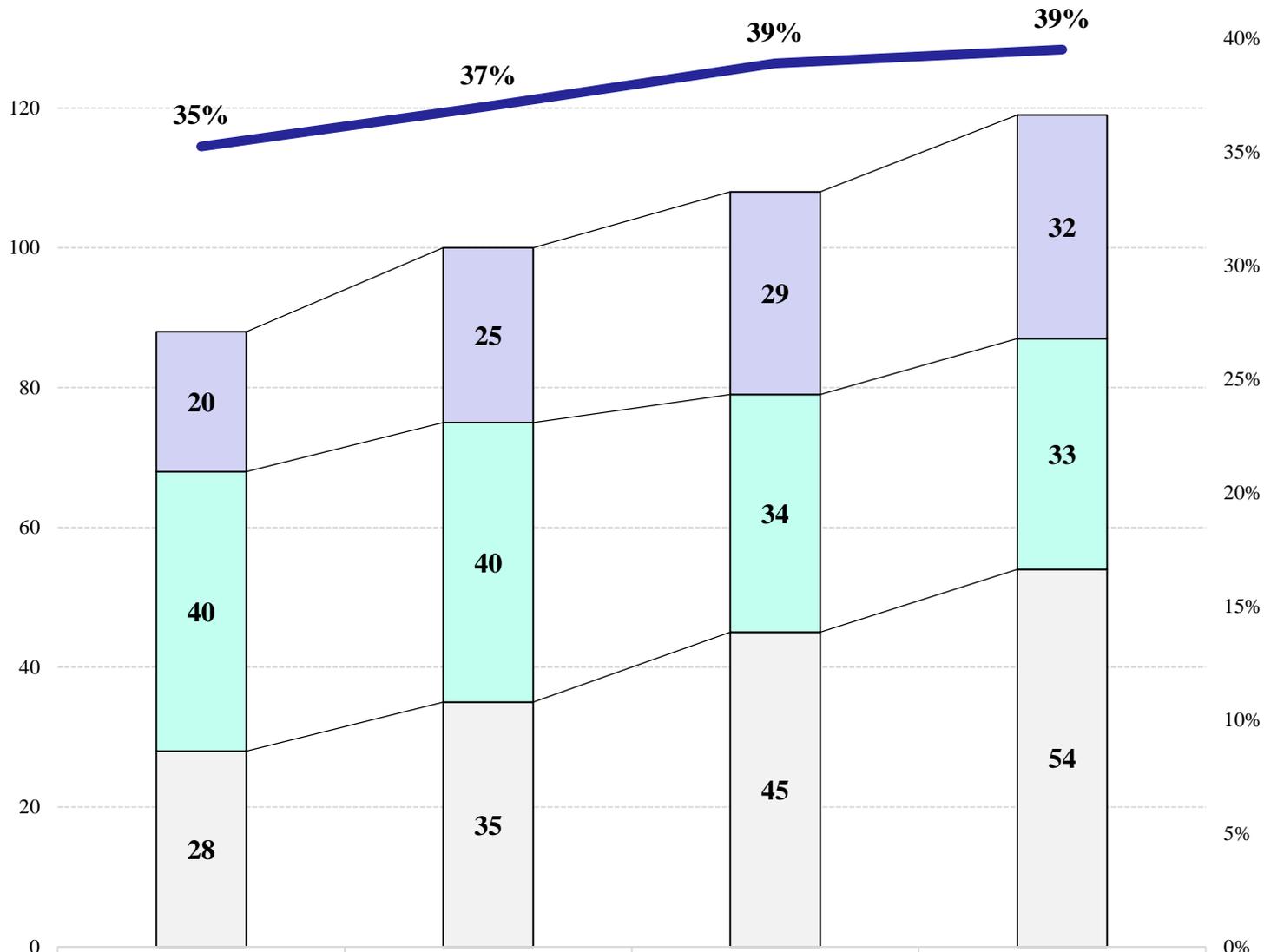
	男子	女子	計(名)
小学生	32	22	54
中学生	22	11	33
高校年齢	18	14	32
計	72	47	119

フリースペースに在籍したまま、
定時制・通信制高校に通う⇒中退防止に効果

*参考 18歳以上：38名
(2020年3月31日現在)

異質・異年齢が混ざり合うインクルーシブな場
⇒安全・安心な居場所づくり

登録者数(小中高)の変化と障がいの診断を持つ子どもの割合



高校生	20	25	29	32
中学生	40	40	34	33
小学生	28	35	45	54
障がいの診断を持つ子どもの割合	35%	37%	39%	39%

基本理念

「生きている」ただそれだけで祝福される
～自己肯定感を育む居場所づくり～

●「不登校はダメ」では、ない

不登校≠勉強嫌い・学校嫌い

学校が安全で・安心して

楽しく学べる環境なら

学校に行きたいと願う子は多い

おどしのような叱咤激励よりも、

「大丈夫」という安心のタネをまく必要

●学校以外の場で学び・育つ選択肢を増やす

(教育機会確保法) 13

昼食づくり（毎日）

～暮らしを取り戻す～

1日に30人～40人が
一緒に食べる



フリースペース
「たまりば」が
始まった29年
前からずっと
続いていること

カリキュラムに縛られない

「子ども時間」をとりもどす
「なにもしない」ことも保障



個別の学習支援

ひとりひとりのペースにあわせて



子どもたち同士も教え合う
定時制・通信制高校に進学した
子どもたちの学習も支援

選択できる各種講座

演奏・芝居・歌・ダンス

アート・ものづくり・英会話

コミュニケーション

科学実験・開発教育など

多数



学校外の多様な学び

「発達障がい」の子どもの支援

「困った」子なのではなく
「困っている」子である

「学校不適應児」ではなく、
「子どもに適應できない学校
教育」の課題



教室の机や壁にとらわれず、一人ひとりの背景や
ニーズに合わせた多様な学びと育ち

この子が持っている得意な分野(強いところ)に光を
あてる

- ・既存の教育では収まりきれない子供たちが育って
いく可能性がある。
(毎日新聞より抜粋)
- ・教育をより柔軟で、多様な発想に持っていかなばと
あらためて思った。未来の学校の在り方のモデル
の一つがここにある。
(東京新聞より抜粋)
- ・既存の学校教育の中では適応できない子供であっても、そ
の中に未来のエジソン、アインシュタイン、未来のアーティ
スト、音楽や、あるいは工芸、美術等を
含めて、そういうところの子供であるから
こそ、逆に世界に大きく貢献できるような
人材が埋もれているかもしれない。
(文部科学大臣の定例記者会見より抜粋)



学校とフリースペースの連携

神奈川県学校・フリースクール連携協議会の設置(2006)

子ども・家庭の保護者が希望した場合は、
学校に出席報告を提出



過去17年間、それらの児童・生徒は

校長裁量によって、すべて学校の出席とみなされ、
通学定期も取得

県教委よりNPOへ教師派遣研修制度(1年間)あり

民間のフリースクール(NPO)が 県や市の教育委員会と一緒に

県内各地区で 「不登校相談会」 「進路情報説明会」を開催

教育委員会とフリースクール等による
不登校相談会

会場：神奈川県立青少年センター

令和元年6月1日(土)
13:00~16:30
(受付12:30~16:00)

◆主催 神奈川県学校・フリースクール等連携協議会
神奈川県教育委員会

◆共催 神奈川県立青少年センター

◆後援 横浜市教育委員会

【全体会】(3階 研修室1)	【相談会】
12:30 個別相談受付開始①	(3階 研修室2, 練習室 ; 2階 多目的プラザ)
13:00 全体会	14:35 個別相談受付開始②
13:10 不登校を経験した子ども・保護者による座談会 ～ 不登校を経験して感じる事、考えること～	14:50 相談窓口ごとに個別相談開始
13:55 フリースクール等の紹介	16:00 個別相談受付終了
	16:30 終了

I 不登校の理解 不登校は問題行動か

1 全ての教職員で、不登校への理解を深めましょう。

不登校は、

- 取り巻く環境によっては、どの児童・生徒にも起こり得ること
- 多様な要因・背景により、結果として不登校状態になっているということ
- その行為を「問題行動」として判断してはならないこと
- 「不登校児童・生徒が悪い」という根強い偏見を払拭すること

小・中学校学習指導要領解説 総則編より

2 不登校の子どもの視点に立って、その気持ちを想像してみましょう。

不登校状態にある子どもの多くは、「なぜ登校できないか自分でもわからない」「行かないやいけないと頭では思うけど、体が動かない」状況にあり、心の中では、「先が見えない」「きっと自分はダメなんだろう」といった、不安や苦しさ、引け目、恥ずかしさ、焦り、罪悪感などの様々な気持ちが渦巻いています。

その保護者も同様に、子どもが登校できなくなったショックや焦り、また、「自分が悪いのでは」といった自責の念など、様々な思いにかられています。

神奈川県教育委員会と一緒に、
小中学校の教職員に向けた
不登校理解のための
パンフレットを作成
(写真は2019年3月作成版)

父さん、母さん…先生

「学校に行けない私はダメですか、
生きている価値はないですか？」

子ども・若者と関わるおとなが
手に入れた「子ども観」

「生きてるだけですごいんだ」

「存在」を根付かせる、つながりを生み出す取組の必要。

「生まれてくれて、ありがとう」

「あなたがいてくれて

幸せだよ」を届けよう！



子どもは
「だいじょうぶ」に包まれると
自然と欲が湧いてきて
自分の頭で考え
自分の足で歩きだす

社会全体で子どもを支える まちのいたるところが「学びの場」に！

地域で子どもと関わるおとなたちが
手に入れたい大切なこと

子どもの育ちには無駄に見える時間やスキマも大事
おとなの「肯定的なまなざし」

子どもの好奇心の芽を摘まないこと

子どもの力を信じ、子どもが自ら伸びていこうとする
ことの邪魔をしない

⇒子どものチャレンジを応援